第１回新しい文化芸術施設の整備に関する検討懇談会
主要発言まとめ

項　目	発　言　要　旨
事業の考え方 （事業展開の基本方針）	近隣との都市間競争の中で劇場・ホールが持っている役割は大きい。地元の観客だけではなく県外から多くの誘客をするために、内実をどうつくるかが重要。 千日前地区を前提にした場合に、短期的には岡山駅からの動線や1kmスクエアでの位置づけが必要だが、中長期的には旭川中島・京橋地区を視野に入れた構想が重要となる。
	よい作品をつくる、教育普及事業をすることはもちろん、劇場をいかに地域に開いていけるか、文化芸術を超えた、ある種社会的な価値を施設がどう持てるかということが、劇場法が目指している一番の精神だろう。
	文化庁の劇場・音楽堂等活性化事業（特別支援事業）の採択されている劇場は中四国にはない。そういったものを目指すという方向もよいかと思う。そうなると岡山の持つ中四国地域への文化的な発信力が大きく変わるし、まちづくりの意味でも岡山は違った印象を持つことができる。
	今岡山が取り組むときに、出来て10年余りになる北九州芸術劇場より後退していたら恥ずかしいこと。 創作やつくる人だけの問題ではなく、地域の中でどうつながっていくかということが抽象ではなく必要になっている。
	にぎわいを考えるときに、劇場・ホールは人が集まる施設ではあるが、公演時以外の日常にどのようににぎわいを持てるかの視点も重要。
	劇場・ホールというのは３６５日稼働しているわけではない。建物として集客の期待をするのならば、それ以外の恒常的な集客装置を再開発事業の中でつくるよう求めていくべき。
	まず、創造型の「劇場」をつくるのか、貸館主体の「ホール」をつくるのかということをはっきりさせないといけない。次の段階での施設のあり方や人員配置などに相当影響する。 「劇場」とは作品をつくり人を育てるところ。「劇場」はハードではなく劇場という行為だと思っている。それくらいの気持ちでつくるのか、それとも単純に発表の場として貸館を市が提供していくのか。
	劇場・ホールだけでは、期待されるにぎわいの創出は難しい。にぎわいの創出には、若者が日常的に集いたくなる「仕掛け」が必要。再開発事業で複合化される施設との相互補完が不可避である。
管理運営 （管理運営の基本方針）	創造支援機能、多目的なオープンスペースなどの部分が現在足りていない。その部分をつくらないといけない。これから色んなものをつくっていく、生みだす工房、ファクトリーになるためには、人材はそこに必要となる。
	スタッフをどう担保し、岡山市がどう育てていけるのか、他の地域の日本全国から岡山で働きたい、住みたいという人をどれだけ集められるかが、劇場をつくる底辺の核になるのではないか。劇場をつくるのに一番最初に手掛けるのはそこだと思う。
	「魅せる」「集う」「つくる」の中でも「つくる」が、これまでは大変に弱かった。これからの劇場では、専門的な職能や鑑賞者の「育成」、その知見や技術、経験の「継承」を行っていく必要がある。
管理運営 （組織体制の基本方針）	何よりも人材が大事。創造型というのはものをつくる場所があればよいということではなく、どういう人のいる場所になるのか、どういう人がいて市民とどうつながっていくのか、その人材をどう配置してどうやってその人たちの力を引き出していくのかが大事。
	「つくる」とは何をどこまでつくり込んでいくのか、それをつくる人材は処遇を最初に決めなければ、永続的で持続可能な劇場運営が期待できない。管理運営を行う人材と経費等をどう考えるのか、施設の性格付け、その施設に必要となる機能と人材の配置は連動する。それらを並行作業で決めていく必要がある。

項　　目	発　　　言　　　要　　　旨
管理運営 (収支計画の考え方)	北九州芸術劇場はうまく機能しているが、人を育てる機能があるだけでなく、それができる予算が確保されていたというのも重要。施設ができたからといってうまくいくわけではない。
	利用者が使いやすい施設をという考え方はよくわかる。しかし採用する機能や配置によっては、スタッフの数が大勢必要となったり、日常的に大変な作業が増えたりする。そのことを整理しないと、同規模の施設でも、５０年やるものなので、人件費やいろんな意味での労力、経費が大きな差となる。
施設の機能・規模	ランドマークという話はわかるが、その前にどういう機能を充実させるのかということを大事にし、それからデザインではないか。 大ホールの舞台幅を市は48mにということだが、必要ない。40mで良いが、広いに越したことはないので、どれだけ拡げられるか検討を。
	今の岡山では、経済的制約や場所の制約などがある中、演劇や音楽などそれぞれ工夫・努力してやっている。これからつくる新しい施設は、そういった市民の活力が吸い上げられるような機能・規模を備えたものとなるのが望ましい。
	施設の交流促進機能も日常的な活動につなげていくとか、市民への創造支援機能などどう計画していくかが、にぎわいとして非常に重要になる。
	創造支援機能や交流促進機能は、場所によって形が変わり、人が育ってきた時に、どのような活動をするための場所がつくれるかというのは、建築設計を考える上でどのように先回りして計画できるかが非常に重要。
	この敷地が難しいのは、商店街側にも、人が歩く場所として正面が必要だが、まち全体をみた時には南側ないし東側にも正面が必要となる。それぞれにどういう表情をつくるかは非常に重要。
	内部の機能から考えることが大事であると同時に、巨大な建築物ができる時に、まちに対してどのようなあり方なのかということも問われる必要がある。その時にデザインの話だけでなく、どのようなまちとの関係を持たせるのかを考える必要がある。
	今回の施設は、市が千日前地区の将来のまちづくりを考えた時のランドマークでありたい、集客装置でありたいということがメッセージとしてあった。ランドマークということはデザインの上で外してはいけないポイントだと思う。
	施設のどこを正面にするか顔とするかは施設計画において非常に重要。正面に対して、市民がどういうルートや交通を利用してたどり着くのか、ということも計画上で議論すべき。この建物の正面は国道２号線側だと思う。
	大ホールに音響反射板をつけると、シンフォニーホールと競合するので不要だと思う。ただしオペラ・バレエ・ミュージカルなどの公演を行うことを考えると、オーケストラピットは必要ではないか。
	現市民会館は、「搬入口が狭いこと」と「音響反射板の一部が舞台転換を制約すること」が、大型の舞台芸術公演を制約してきた。
	中ホールは、現市民文化ホール同様に音響反射板を備えることで、演劇だけでなく音楽需要への期待に応えることも考えられる。
その他	市民が自分たちがかかわってつくり上げたということが、完成してからの愛着をもたらす。それが実際に足を運ぶことにつながったり、全国に誇れる施設へとつながるのではないか。 積み上げてきたコンセプト、施設イメージ、施設整備の条件など基本構想を踏まえた進行にしていただきたい。